

令和元年6月25日現在

機関番号：82616

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01029

研究課題名(和文) 大学生の真正な自己表現と機能的な対人調整をめざす社会情動的学習プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a socioemotional learning program aiming at authentic self-expression and functional social adjustment among college students

研究代表者

山地 弘起(YAMAJI, Hiroki)

独立行政法人大学入試センター・研究開発部・教授

研究者番号：10220360

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学生による日常のコミュニケーション習慣の自覚化と相互吟味を促進し、新たな知識や技能を自らのコミュニケーション行為のもとで活用・構築する授業の開発を行った。まず、身体・言語・メディア・異文化間の各コミュニケーション領域における実践研究を進めた後、全体に通じる授業設計の指針として、ある種の非日常との境界面で深い関わりと相互のサポートが生じる場を工夫し、それぞれの学生に何らかの対人葛藤を経た上での協働達成の経験がなされることが重要であると示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果は大学でのコミュニケーション教育の一方法を提案するものであるが、通常行われている規範的なコミュニケーション技能の訓練ではなく、学生が日常の対人関係のあり方を自覚化しつつ、自他ともにケアできるような自己表現と対人調整をめざす体験学習の場の提案である。こうした批判的・創造的なコミュニケーション様式を探る教育機会は、日本でも欧米でも十分に開発されていないため、新たな実践指針としての意義を有する。

研究成果の概要(英文)：In this research, we developed pilot courses that would promote awareness and mutual exploration of college students' communication habits, and that would make possible the utilization and construction of newly learned knowledge and skills in one's communication activities. After separate practical studies in four communication domains (somatic, verbal, media, and cross-cultural), it was suggested that the general guidelines common to all domains include the preparation of a rather unusual learning context that engenders deep relating and mutual support, whereby each student is able to experience collaborative achievement through some kind of interpersonal conflict.

研究分野：教育工学

キーワード：大学生 対人関係文化 コミュニケーション教育 社会情動的学習

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年の大学教育改革のなかで、社会人基礎力としての様々な汎用的技能の習得が強く求められている。その中でも、とくにコミュニケーション力は産業界から最も要請されている技能の一つであり(日本経済団体連合会, 2011 など)、また国際共同で整理された「21世紀型スキル」(グリフィン他, 2014)においても、コミュニケーションやコラボレーションの力は大きな柱の一つとされている。

しかし現代の学生たちの日常は、他者との繋がりに過剰に配慮し、排除を恐れて他者による受容を確認する「キャラ」を演じ続けなければならない、いわばコミュニケーション強迫の状況にある(土井, 2009)。こうした相互抑制の力動は日本の対人関係文化の負の側面であるとする論者もあり(中津, 2005)。多様な背景をもつ人々との間で真正な自己表現や機能的な対人調整を図る、創造的なコミュニケーション力の育成は容易になし得ないことを示唆する。今日盛んにアピールされる「グローバル人材の育成」においても、語学力や異文化理解だけでなく、日常的なコミュニケーション様式を自覚し相対化しつつ、相互調整や交渉の方途を探り出すための効果的な教育方法が不可欠と考えられる。

そこで本研究では、欧米や日本の初等・中等教育で浸透しつつある社会情動的学習(以下 SEL; Social and Emotional Learning)に着目した。SEL は、「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした、対人関係に関するスキル、態度、価値観を育てる学習」(小泉, 2011)と定義され、従来の社会的技能訓練、対人ストレス管理、感情教育、人間中心の教育、ホリスティック教育など広範囲の心理教育を包含するものである。SEL では様々な体験学習の方法が開発されており、それらの効果は学校適応や知的学習の促進の観点からまとめられることが多いが(Durlak et al., 2011 など)、本研究がテーマとするような批判的・創造的なコミュニケーション教育における意義も示唆されている(Weissberg & Cascarino, 2013)。もっとも日本の大学教育では、初年次教育のなかで SEL の関連実践が散見されるものの(香川, 2005 など)、日常習慣を意識化しつつ自他ともにケアできるコミュニケーション教育の試みはほとんど見られない。これは欧米でも同様であり、大学教育での SEL 自体がまだ発展途上の段階である。

2. 研究の目的

本研究では、上記の議論を踏まえて、自身の体験状況を丁寧に把握し他者との間で適切かつ有効にニーズを調整できるような、真正な自己表現と機能的な対人調整をめざす授業開発を試みた。その際、コミュニケーションの主要4領域(身体・言語・メディア・異文化間)を意識し、それぞれの領域における授業開発を踏まえてそれらを統合する方針を採った。

3. 研究の方法

(1) 先行研究やグループインタビューなどから、学生の対人関係文化の分析を行った。研究分担者の間で各コミュニケーション領域での知見を整理する一方、学生のコミュニケーション葛藤の経験を探索した。

(2) 国内外の SEL 事例の展望を踏まえて、ENSEC (European Network for Social and Emotional Competence) など関連事例の訪問調査を行った。

(3) 以上の結果を参考に、体験学習ワークショップおよび正課内授業において実践研究を行った。そこでは、学生による日常のコミュニケーション習慣の自覚化と相互吟味を促進し、新たな知識や技能を自らのコミュニケーション行為のもとで活用・構築する授業の開発をめざした。最終的には4領域全体(身体・言語・メディア・異文化間の各コミュニケーション領域)に通じる授業設計の指針や学習評価のあり方などを共有し整理した。

4. 研究成果

(1) 社会情動的学習の国際動向

文献展望や訪問調査から、欧米圏を中心に浸透しつつある SEL は、米国の Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning (CASEL)を中心に進められている一種の教育文化運動であることがわかった。めざされているのは、家庭・学校・地域を有機的に繋ぐ evidence-based な普遍的予防教育である(Weissberg, Durlak, Domitrovich, & Gullotta, 2015)。アクティブラーニングやポジティブな学級・学校風土の醸成なども SEL を促進する重要な方法とされるが、ともすると学校適応が優先され学習者の well-being やケアリング文化の重要性が見過ごされるとの批判もあり(Hoffman, 2009 など)、十分な成果に至っているかどうかは未だ明らかでない。

(2) 身体コミュニケーションに焦点づけた授業開発

大学教育では海外でも日本でも SEL のようなシステミックな介入はほとんどみられないが、米国では社会情動的能力を向上させるプログラムが様々に導入されており、そのうちマインドフルネスのプログラムの効果が確認されている(Conley, 2015)。そこで、マインドフルネスと重なることが多い身体アウェアネス(判断を混じえずにあたたかい関心を向け、身体ぐるみで精細に聴き沿っている状態)を向上させ、自分の「今ここでの現実」をより深く把握するとともに状況に応じた心身の自己調整と機能的対応を促進する教養教育授業を開発した。一部のツールをウェブ上に公開している(<https://researchmap.jp/read0179378/>資料公開/)。

(3) 言語コミュニケーションに焦点づけた授業開発

自らが実践する自己省察としての文章表現「パーソナル・ライティング」の作品から、現代の大学生の特徴として指摘されがちな「学びのモチベーションの空洞化」や「コミュニケーション能力の未熟さ」、「自己認識の低さ」や「他者・社会認識の未確立」などといった内容が多くみられた。例えば、大学初年次生約40名の作品の変遷を「自我観」に焦点を当てて追ってみたところ、多くの学生の自我像には判で押したようなネガティブなイメージがあり、相似的・同型的であるということが明らかになった。それらは、「人見知りである」「友達の輪からいつも外れている」「傷つくのが怖い」「一人であることが恥ずかしい、でも本当は一人でいたい」といったものである。その一方で、「友達がいなくてはならない」「友達は沢山ほしい」という根強い強迫観念がある。加えて、個人的には「いじめを受けていた」や「いじめをしていた」、あるいは、高校時代に「正規のルート」から落ちこぼれてしまったという挫折感や、「ひきこもっていた」「万年ぼっち(一生涯一人ぼっちの孤独)」といった自分に自信の持てない自己否定感や自己嫌悪感があり、さらには両親の離婚や不和という家庭事情も抱えているなどの諸事情も絡んでいた。こうした内容を作品にする者が圧倒的に多いことから、その偏りと同型性に大学生の対人関係文化やコミュニケーションの背後にある具体的事実が顕在化したといえる。

(4) メディアコミュニケーションに焦点づけた授業開発

オンラインメディアの使用率においては、それ以前のメディア・テクノロジーとは異なり男女間での差異はほとんどなく、それどころか、SNSによっては男性よりも女性の使用率が高いという調査結果もある。また、特にSNSに関しては、年齢が下がるほど使用率が高くなることから、女子学生たちへのインタビュー調査を通じて、オンラインでのコミュニケーション行為でどのような現象が起きているのかを探索することが可能となった。調査対象の女子学生は、初年次の前期にオンラインメディアに関する文献を精読し、授業内での討論などを行い、現在のインターネット環境やSNSの問題についてある程度の知識を持っていた。

コミュニケーション行為を行う際に、「ケア」や「配慮」は他者との関わり合いに際して前景化する言葉であると同時に、オンラインでの自己の安全や立ち位置の確保を構築する際にも重要となる言葉である。オンラインメディアやSNSのネットワークやコミュニティにおいて、女子学生たちの間では様々なケアや配慮が意識され実践されていることが確認され、その戦略や目的、用いられ方などから、オンラインでの対人関係文化の一端が示された。学習内容とともに、こうした当事者としての相対化の機会が創造的調整を促進する可能性も示唆された。

(5) 異文化間コミュニケーションに焦点づけた授業開発

多文化共生社会の構築を目標としたプロジェクトワーク型学習の基礎を提供するために、コミュニケーションのワーク(エンカウンターグループやNLP[神経言語プログラミング]を通してこれまでのコミュニケーションを振り返る)、多文化共生を共に考える活動(偏見や差別、移民、身近なヘイトスピーチの事実を知る)、グループによるドイツ人留学生との交流会の企画と実施、最終課題作成(大学在学中の留学あるいは国内での多文化共生に関する企画を立てる)という流れの初年次授業を開発した。中間の授業評価(6月)では、「留学生との活動はあるが『国際交流』とは遠く『英語を話す環境でもない』」というマイナス評価であったが、自身及び他者との対話から「自ら拓く」ことを学生と模索した結果、最終評価では「学生が勧める授業」に選ばれた。

従前実践していた留学生教育等ではドラマ(演劇的知)の活用が確認されていたため、初年次教育でもその活用を試みたが、学生が実社会でのコミュニケーションのあり方を実感できないことや身体表現の事実認識が希薄であること、ドラマを通じた自己開示への抵抗感が強いこと、などから、上記授業では演劇知以前の体験学習の方法を模索することになった。

(6) 統合の試み - 授業設計と学習評価の指針

以上の授業開発は、学生による日常のコミュニケーション習慣の自覚化と相互吟味を促進し、新たな知識や技能を自らのコミュニケーション行為のもとで活用・構築することをめざして行われた。それらを統合する指針とは、深い関わりを生む文脈の設定と相互のサポート、とまとめられそうである。深い関わりが生じる文脈があって初めて、体験を丁寧に吟味できたり自身の習慣が相対化されたりするのであり、学生間あるいは教員と学生との間でサポートし合う関係が成り立っていて初めて、機能的創造的な関わりが試みられると考えられる。

但し、そうした場合は通常の教室内では実現しにくいかもしれない。圧倒的な成績評価者である担当教員が、授業で紹介された知識、スキル、作品について最終判断を下すという構造では、充実したコミュニケーションや深い学びは生じにくい。一方、大学外でのプロジェクト活動などではそのような構造が成立していない。あるゼミの3年生の活動事例では、契約に基づいた「地方自治体から依頼された中小企業のPV制作」の社会実践におけるものづくりにおいて、評価、批評、修正は契約相手方から示され、行政や教員は制作活動には参加せず評価も行わなかった。金銭契約に基づくその仕事には納期があり、完成した映像の修正は複数回に及んだ。3ヶ月から半年に亘るその修正作業に参加しながら、学生たちは迷い、依頼や指示に悩みながら対応し、かつ映像制作の意思にこだわりつつ、社会で生きる術も学び取った。そこでは多層的なサポートが学生同士で行われ、結果としてより創造的な対人関係文化が生じていたといえる。

もちろん、そうした理想的なケースばかりではなく、また必ずしも学外に出なければならぬわけでもないであろう。ある種の非日常との境界面で深い関わりと相互のサポートが生じる場を工夫し、それぞれの学生に何らかの対人葛藤を経た上での協働達成の経験ができれば、真正な自己表現と機能的な対人調整へのSEL実践になりうるのではないだろうか。

<引用文献>

- Conley, C. S. (2015). SEL in higher education. In J. A. Durlak, C. E. Domitrovich, R. P. Weissberg, & T. P. Gullotta (Eds.), *Handbook of social and emotional learning: Research and practice* (pp. 197-212). New York: Guilford.
- 土井隆義 (2009). キャラ化する / される子どもたち - 排除型社会における新たな人間 岩波書店
- Durlak, J. A., Weissberg, R. P., Dymnicki, A. B., Taylor, R. D., & Schellinger, K. B. (2011). The impact of enhancing students' social and emotional learning: A meta-analysis of school-based universal interventions. *Child Development, 82*, 405-432.
- グリフィン他編 / 三宅なほみ監訳 (2014). 21世紀型スキル - 学びと評価の新たなかたち 北大路書房
- Hoffman, D. M. (2009). Reflecting on social emotional learning: A critical perspective on trends in the United States. *Review of Educational Research, 79*, 533-556.
- 香川順子 (2005). 他者との関係性を重視した自己発見を支援する初年次教育プログラムの開発 大学教育学会誌, 27, 152-157.
- 小泉令三 (2011). 子どもの人間関係を育てる SEL-8S 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の導入と実践 ミネルヴァ書房
- 中津遼子 (2005). 英語と運命 三五館
- 日本経済団体連合会 (2011). 産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果
- Weissberg, R. P., & Cascarino, J. (2013). Academic learning + social-emotional learning = national priority. *Phi Delta Kappan, 95*(2), 8-13.
- Weissberg, R. P., Durlak, J. A., Domitrovich, C. E., & Gullotta, T. P. (2015). Social and Emotional Learning: Past, present, and future. In J. A. Durlak, C. E. Domitrovich, R. P. Weissberg, & T. P. Gullotta (Eds.), *Handbook of social and emotional learning: Research and practice* (pp. 3-19). New York: Guilford.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 20 件)

- 谷美奈、表現教育の可能性「STEM+ARTが求められる時代に」、成城大学共通教育論集、査読無、11号、2019、161 - 175
- Gehrtz 三隅友子、徳島に来る留学生の度重なる災難！ とくしま異文化キャラバン隊 2017、近畿化学工業界、査読無、12月号、2018、5 - 8
- Gehrtz 三隅友子、留学生との交流による多文化共生のまちづくり とくしま異文化キャラバン隊 2017、自治体国際課フォーラム、査読無、11月号、2018、26 - 27
- 平本毅、谷美奈、川島理恵、立場を異にする者同士のかかわりの実践と研究、質的心理学フォーラム、査読無、10巻、2018、92 - 94
- 寺田恵理、保崎則雄、手で書くこと、手書き文字に対する認識に関する一考察、日本教育工学会論文誌、査読有、42巻(Suppl.)、2018、145 - 148
- 藤城晴佳、保崎則雄、ティーチングアシスタントの視点から語られる授業実践に関する事例研究、京都大学高等教育研究、査読有、24巻、2018、45 - 54
- 劉艶偉・江波・Gehrtz 三隅友子、NLBにおける多義動詞「浮く」についての意味分析 日本語学習者の立場から、徳島大学国際センター紀要、査読無、14号、2018、1 - 7
- Gehrtz 三隅友子、多文化共生のまちづくり 文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 2017、徳島大学国際センター紀要、査読無、14号、2018、14 - 19
- 平本毅、谷美奈、川島理恵、立場を異にする者同士のかかわりの質的記述、質的心理学フォーラム、査読無、9巻、2017、4 - 13
- 平本毅、川島理恵、谷美奈、立場を異にする者同士の交流はいかにして生じ、それによって何をもたらすのか？、質的心理学フォーラム、査読無、9巻、2017、64 - 69
- 谷美奈、自己形成史におけるパーソナル・ライティングの意味 パーソナル・ライティングを経験した元学生(当事者)への聞き取り調査から、大学教育学会誌、査読有、39巻1号、2017、125 - 134
- 劉玉琴、時春慧、Gehrtz 三隅友子、現代日本における「あなた」の使用について ドラマ資料を利用して、徳島大学国際センター紀要、査読無、13号、2017、1 - 4
- Gehrtz 三隅友子、留学生との交流による多文化共生のまちづくり とくしま異文化キャラバン隊 2016、徳島大学国際センター紀要、査読無、13号、2017、5 - 14
- 鈴木広子、菅原安彦、保崎則雄、オンライン・ディスカッションを通じた学生間のインタラクションと英語の変化、東海大学教育開発研究センター研究紀要、査読有、24号、2016、27 - 41
- 保崎則雄、北村史、土性香那実、小学校英語活動用マルチメディア教材の制作と使用教員による評価、教育メディア研究、査読有、13巻1号、2016、47 - 57
- Tani, M., Formation du sujet d'apprentissage par la pratique de l'essai personnel: l'expression écrite comme réflexion sur soi Presences: Revue transdisciplinaire d'étude des pratiques psychosociales, 査読有、9巻、2016、1 - 19
- 山地弘起、アクティブラーニングとは、女子体育、査読無、58巻8-9号、2016、14 - 19
- 子亮、劉玉琴、Gehrtz 三隅友子、ビデオコーパスにおける「おつかれ系」表現の実証的研究、

徳島大学国際センター紀要、査読無、12号、2016、1 - 13

Gehrtz 三隅友子、多文化共生のまちづくり・未来への第一歩 提言作成とフューチャーセンター、徳島大学国際センター紀要、査読無、12号、2016、37 - 46

保崎則雄、大学研究室が実践する小規模での米国短期海外研修の活動に参加した学生の自己評価、気づき、学びの分析、総合学術学会誌、査読有、15号、2016、45 - 50

[学会発表](計33件)

垣塚菜生、藤城晴佳、保崎則雄、ストリートダンサーの語りからみる“教える経験”を通じた指導観の変容に関する事例研究、第25回大学教育研究フォーラム、京都大学、2019.3

山地弘起、Meta-Relating を鍵概念としたコミュニケーション教育のデザイン、第25回大学教育研究フォーラム、京都大学、2019.3

山地弘起、萩原健次郎、保崎則雄、Gehrtz 三隅友子、学生の居場所・関わり・生きる場所「コミュニケーション教育」の批判的検討、第25回大学教育研究フォーラム(参加者企画セッション) 京都大学、2019.3

丹羽量久、山地弘起、Bernick, Peter John、成人用メタ認知尺度の改善とその評価の試み、第25回大学教育研究フォーラム、京都大学、2019.3

丹羽量久、山地弘起、大学初年次学生のメタ認知と学習活動 情報基礎科目における探索的検討、日本生産管理学会第48回全国大会、尾道市立大学、2019.3

Gehrtz 三隅友子、仙石桂子、教育にインプロをとりにてみよう! 自らの体験を可視化する試み、平成30年度全学FD推進プログラム大学教育カンファレンス in 徳島(ワークショップ) 徳島大学、2018.12

Yamaji, H., An efficacy study of somatic psychoeducation at a Japanese university, United States Association for Body Psychotherapy 2018 National Conference, Pacifica Graduate Institute (Santa Barbara), 2018.11

丹羽量久、山地弘起、Bernick, Peter John、MAI 仮訳版による大学初年次学生のメタ認知測定の試み、教育システム情報学会第43回全国大会、北星学園大学、2018.9

山地弘起、大学生の「身体への意識」および「身体への信頼」とwell-being 関連尺度との関係、日本心理学会第82回大会、仙台国際センター、2018.9

保崎則雄、藤城晴佳、創造的な映像制作授業におけるEMIの実践と評価、外国語教育メディア学会第58回全国研究大会、千里ライフサイエンスセンター、2018.8

丹羽量久、山地弘起、Bernick Peter John、成人用メタ認知尺度に関する検討、第24回大学教育研究フォーラム、京都大学、2018.3

山地弘起、丹羽量久、金西計英、三宮真智子、大学教育におけるメタ認知の捉え方 質問紙による測定の可能性と限界、第24回大学教育研究フォーラム(参加者企画セッション) 京都大学、2018.3

山地弘起、大学における社会情動的学習(SEL)の意義と可能性、第24回大学教育研究フォーラム、京都大学、2018.3

保崎則雄、藤城晴佳、「対話」重視のリフレクション活動が制作・表現型授業における学びに与える影響の分析、第24回大学教育研究フォーラム、京都大学、2018.3

Gehrtz 三隅友子、仙石桂子、演劇的知とコミュニケーション 自らの教育活動を振り返る、平成29年度全学FD推進プログラム大学教育カンファレンス in 徳島(ワークショップ) 徳島大学、2018.1

保崎則雄、高木博貴、藤城晴佳、垣塚菜生、関根ハンナ、オンデマンド式授業と対面授業をブレンドした「プレゼンテーション基礎」授業の実施と評価と課題、第43回全日本教育工学研究協議会全国大会、和歌山県民文化会館、2017.11

山地弘起、3年次学生調査における大学入学後の能力向上と主体的学びとの関連、日本教育心理学会第59回総会、名古屋国際会議場、2017.10

山地弘起、マインドフルネス、セルフ・コンパッション、フォーカシングの尺度間の関連、日本心理学会第81回大会、久留米大学、2017.9

跡見順子、山地弘起、跡見友章、東芳一、「重力場で創発したいのち(細胞)が生み出すリアルな身体」・「立ち居振る舞う身体」から、自発性と健康を育む身心にどうつなげるか、教育にどう組み込むか、日本教育工学会第33回全国大会(ワークショップ) 島根大学、2017.9
平本毅、谷美奈、立場を異にする者同士のかかわりの質的研究 地域の居場所と「立場を異にする者」同士の交流、日本質的心理学会第14回大会(「質的心理学会フォーラム」編集委員会企画シンポジウム) 首都大学東京、2017.9

⑲ Gehrtz 三隅友子、コミュニケーションの基礎 ワークショップ体験から学ぶ、平成29年度四国SPODフォーラム、徳島大学、2017.8

⑳ 山地弘起、保崎則雄、Gehrtz 三隅友子、谷美奈、大学生の対人関係文化をふまえたコミュニケーション教育を探る、第23回大学教育研究フォーラム(参加者企画セッション) 京都大学、2017.3

㉑ 藤枝美穂、宮本節子、鈴木広子、菅原安彦、小原平、保崎則雄、松浦浩子、飯野一彦、TEDを利用した英語によるオンラインディスカッション交流:学生アンケートの分析、第23回大学教育研究フォーラム、京都大学、2017.3

- ②4 藤城晴佳、保崎則雄、映像制作授業内でのリフレクションに注目した peer learning において他者の言動を通して再認識される自己の創造、第 23 回大学教育研究フォーラム、京都大学、2017.3
- ②5 山地弘起、川越明日香、対人関係傾向とアクティブラーニングの効果 公的自己意識の影響に着目して、日本教育心理学会第 58 回総会、サンポートホール高松、2016.10
- ②6 Takeda, N. & Hozaki, N., Comparative analysis of willingness to communicate (WTC) perspectives on face to face (FTF) and social networking service (SNS), 14th International Conference for Media in Education, 京都外国語大学、2016.8
- ②7 Yamaji, H., Effects of somatic psychoeducation for Japanese college students, 31st International Congress of Psychology, パシフィコ横浜、2016.7
- ②8 谷美奈、自己形成史における物語とパーソナル・ライティング 「パーソナル・ライティング」を経験した大学卒業生への聞き取り調査から、大学教育学会第 38 回大会、立命館大学、2016.6
- ②9 山地弘起、Gehertz 三隅友子、谷美奈、保崎則雄、田中東子、日本人大学生の対人関係文化からみたコミュニケーション教育の課題、第 22 回大学教育研究フォーラム（参加者企画セッション）京都大学、2016.3
- ③0 山地弘起、身体への信頼 体験学習型授業における効果検討と尺度の改善、日本心理学会第 79 回大会、名古屋国際会議場、2015.9
- ③1 Gehertz 三隅友子、仙石桂子、日本語教育におけるパフォーマンスラーニング 演劇的知を活かす、第 19 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム、ポルドー・モンテニュ大学（フランス）2015.8
- ③2 Gehertz 三隅友子、地域と作る演劇と日本語教育 2015 新たな評価の観点から、第 28 回日本語教育連絡会議、ザグレブ大学（クロアチア）2015.8
- ③3 山地弘起、西田治、谷美奈、体験工房：ミュージック&ライティングによる新たなコミュニケーション教育の可能性、大学教育学会第 37 回大会、長崎大学、2015.6

〔図書〕(計 4 件)

- 東谷護（編著）谷美奈（分担執筆）ナカニシヤ出版、表現と教養 スキル重視でない初年次教育の探求、2019、133 - 144
- 田中東子、山本敦久、安藤丈将（編著）ナカニシヤ出版、出来事から学ぶカルチュラル・スタディーズ、2017、272
- 山地弘起（編著）谷美奈（分担執筆）田中東子（分担執筆）保崎則雄（分担執筆）ナカニシヤ出版、かわり方を拓くアクティブ・ラーニング、2016、212
- 渡部淳+獲得型教育研究会（編著）Gehertz 三隅友子（分担執筆）旬報社、教育プレゼンテーション、2015、79 - 85

6 . 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：保崎 則雄	研究分担者氏名：三隅 友子
ローマ字氏名：(HOZAKI, Norio)	ローマ字氏名：(MISUMI, Tomoko)
所属研究機関名：早稲田大学	所属研究機関名：徳島大学
部局名：人間科学学術院	部局名：国際センター
職名：教授	職名：教授
研究者番号（8 桁）：70221562	研究者番号（8 桁）：20325244
研究分担者氏名：田中 東子	研究分担者氏名：谷 美奈
ローマ字氏名：(TANAKA, Tohko)	ローマ字氏名：(TANI, Mina)
所属研究機関名：大妻女子大学	所属研究機関名：帝塚山大学
部局名：文学部	部局名：全学教育開発センター
職名：准教授	職名：准教授
研究者番号（8 桁）：40339619	研究者番号（8 桁）：60582129

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。